

キラキラ輝いてます！

—東日本大震災復興支援ボランティア編—

自分たちに、今できることを無理なく続けていきたい

TOMO&STEKY ともすてきい
〜ともに支えられて〜

裁縫さいほうで被災地を応援

きっかけは袖口カバー50個

TOMO&STEKYは、裁縫仲間9人の頭文字を組み合わせた名称で森澤美智子さんが代表を務める。「ともに支えられて」というキャッチフレーズがあり、「友だち」のとも、「共に」とも、「支えられて」はお互いさまという意味だ。主な活動は、袖口カバーやボトルカバーなどの手づくり品を被災地に届けること。1000人分を目標に活動していて、役場の先遣隊せんけんたいや町社会福祉協議会のツアーなどを通じて、今までに700人分を被災地に届けている。

今年の2月11日に森澤さんの娘家族が岩手県盛岡市に引っ越した。その矢先、東日本大震災が発生したため、4月27日の花巻空港行きチケットをどうにか入手した。行くにあたり森澤さんは、以前から便利に使っていた袖口カバーを持参することにし、裁縫仲間6人に声をかけて出発前夜まで作業を続け、50個を仕上げた。

「4月28日に盛岡市災害ボランティアセンターに袖口カバーを持参して、アセントラーに直接手渡すことができました。課長さんに直接手渡すことができました。課長さんは、『あーっ。埼玉から手づくりの品物をありがとうございます』と喜んでくれました」と森澤さんは笑顔で話す。5月7日に毛呂山町に戻り、裁縫仲間に被災地の現状を話すと、裁縫で被災地を応援しようということになり、TOMO&STEKYが発足したという。

2人のボランティア体験

森澤さんは、5月5日に岩手県野田村（久慈市に隣接）に行っている。「被災地は、家などが何も無く、

車はひっくり返り、船は陸地の奥まで流されていました。私は、体育館で被災者家族の必要品を支援物資の箱から探す作業を行ったのですが、少しでも被災された人の力になりたいという思いから夢中で作業してしまい、『ボランティアは絶対に無理をしてはいけない』という現地責任者の言葉の意味を身をもって理解することになってしまいました」と話してくれた。

仲間のひとり小高イツ子さんは、森澤さんと一緒に7月2日の町社会福祉協議会主催のツアーがれきてきまに参加し、福島県いわき市で瓦礫撤去のボランティアを行っている。

「うわあー。これ一日で片付けるの？ がんばらなくちゃ」と思い、一生懸命作業した小高さん。作業中



福島県いわき市での瓦礫撤去作業

無理なく続けることが大切

「私たちは、被災地に行ってボランティアはできなくても好きな裁縫で支援しよう。手づくり小物品を届けようと『1000人分を目標』に4月から活動しています。今では輪も広がり材料などを寄附してくれる方がたを含め20人以上の協力のおかげで、ともに支えられています。これからも『自分たちにできることを無理なく行うボランティア』を合言葉に、自宅でできる被災地支援を楽しみながら続けていきたいと思います」と森澤さんと小高さんは話してくれました。



救援物資が置かれている岩手県野田村の体育館

「私たちは、被災地に行ってボランティアはできなくても好きな裁縫で支援しよう。手づくり小物品を届けようと『1000人分を目標』に4月から活動しています。今では輪も広がり材料などを寄附してくれる方がたを含め20人以上の協力のおかげで、ともに支えられています。これからも『自分たちにできることを無理なく行うボランティア』を合言葉に、自宅でできる被災地支援を楽しみながら続けていきたいと思います」と森澤さんと小高さんは話してくれました。



TOMO&STEKYのメンバーとサポーターの皆さん
今回、話をうかがった森澤美智子さん（最後列右から3人目）
小高イツ子さん（〃 右端）